

大学コンソーシアム京都インターンシップ・プログラム
長期プロジェクトコース プロジェクト報告書

社会福祉法人あだち福祉会

京都こども宅食プロジェクト

田口愛望・中山紗佑里
2023年11月16日

1 はじめに

本報告書は、田口・中山の2人が京都こども宅食プロジェクトにインターンシップ生として参加し、2023年6月から2023年11月までのおよそ5ヶ月間の活動についてまとめ、成果を報告したものである。

2 京都こども宅食プロジェクトについて

こども宅食とは、経済的に厳しい家庭に対して定期的に食品を「届ける」取り組みである。東京都の文京区で宅食支援がスタートし、京都こども宅食は「一般社団法人こども宅食応援団」・「京都市」・「社会福祉法人あだち福祉会」の三社協定により、コロナ禍に始まった。

食品を「届ける」ことにより、そこから「つながり」を作り、各家庭を見守りながら必要に応じて様々な支援に「つなげる」ことを目指す「アウトリーチ型」の支援として、行政がすでに行っている支援にプラスして取り組まれている。また、京都こども宅食の取り組みでは「伴走型支援」として、深刻化する社会的孤立に対応するために「つながり続けること」を目的とする支援を行っている。



※出典：「京都こども宅食プロジェクト 公式ホームページ」（京都こども宅食）（こども宅食とは | 京都こども宅食プロジェクト (kyoto-kodomotakushoku.com)）参照日：11月15日

こども宅食の支援物資は、就学支援を受ける小学生の子どもがいる家庭向けに配送される。毎回の梱包作業では、様々な企業、幅広い世代のボランティアの方々の協力により、約20品目の物資を1つの段ボールに詰めていく。そして、配送を通して見守り活動も行っている配送会社ココネットによって、宅食利用者のもとへ支援物資が届けられる。

また、宅食利用者に物資の配送だけでなく相談先と思ってもらえるような関係の構築に加え、貧困が原因による体験格差に着目し、経済的に厳しい家庭の子供たちに体験機会の提供として宅食利用者向けに様々なイベントを開催している。例えば、寿司職人を体験できるイベント、オーケストラの演奏を間近で聴けるイベントなどだ。

3 活動内容

次に、プロジェクトでの活動内容について、大きく3つに分けて挙げる。

1つ目に、梱包作業への参加、宅食利用者リストの整理を行った。

梱包作業では、宅食利用者に向けて配送される物資を他のボランティアの方々と箱に詰めていった。幅広い年代、立場の多くの人が支援に関わっていることや、手際良く作業が進められていく現場の様子に驚いた。

また事務作業のお手伝いとして、宅食利用者の個人情報等が記載されたリストを整理した。Excelでの慣れない作業であったが、コツを掴んでからは効率よく作業を進めることができた。

その他の事務作業として、LINEで宅食利用者にお役立ちナビサイトの紹介を行った。当てはまる項目にチェックを入れるだけで、役立つ支援先を知ることができるもので、是非とも気軽に活用して欲しいと思い、文面等を考えた。

2つ目に、様々な支援団体へのインタビューや団体の職員との会話を通して、団体の現状について認知した。

社会福祉協議会や青少年活動センター、実際に運営されているこども食堂など、様々な支援団体へのインタビューを行い、成り立ちから各々が抱える課題や現状、思いまで聞くことができた。そこでのお話を踏まえつつ、京都こども宅食が抱える課題を明らかにし、どのように解決していくべきかを考えた。加えて、貧困による孤独孤立や体験格差が生じていることは、社会問題として深刻であることを知った。

3つ目に、「京都から発信する政策研究交流大会」に向けて、論文を作成した。

厳しい生活状況にある家庭に対する支援のあり方について、京都市に対し体験格差に関する新たな都市政策を提案した。

4 得られた成果について

今回のインターンシップで得ることができた成果を主に2点挙げる。

1点目は「団体の課題発見」である。プロジェクトの概要を知り活動に参加する過程で、(1)利用者のニーズと団体の意向にギャップがあること、(2)配送時に伺える家庭の様子と既にあるアンケート項目からは、家庭の現状を把握することが難しいということ、(3)支援団体同士の横のつながりが少ないことを課題として団体に提案した。

(1)政策提言の客観的視点を得るために、多様な学生や社会人が利用するスチューデントラボを訪れた。そこでの他者からの問いかけを通じて、私たちが今まで団体に慣れるために団体の意向・方針に対して、自分の意見・考えを持っていなかったことに気づけた。そこで改めて団体が抱える課題について考え直してみると、団体の意向が先行し、宅食利用者のニーズがあまり優先されていないのではないかとという考えに至り、このことを団体に対して提案することができた。

(2)配送は委託をして各家庭に食品等が届けられていることから、実際に団体の職員が配送を行って利用者と顔を合わせ、家庭の様子を観察するなどの見守り活動は行っていない。加えて、毎回の配送時に配送会社ココネットにとるアンケートの自由項目の回答が「問題なし」のような回答が多いことから、家庭の状況が見えづらい。このことから、各家庭の

ニーズ等を把握することが難しいという課題を挙げた。

(3)こども支援団体は京都こども宅食プロジェクト以外にも多く存在するが、当団体は他の団体とのつながりが少なく、他の団体がどんな活動を行なっているのか把握できていない状況であった。

実際にこども支援団体や行政へインタビューを行った調査では、支援団体同士のつながりの大切さを実感した。団体同士が浅く広くでもつながっておくことで、「どんな団体がどんな活動をしているのか」、「他団体も同じような悩みを抱いていないのか」といった情報を共有できる。このつながりの先に、利用者への充実した支援の提供を実現することができると思われる。

2点目に、団体の職員が改めて団体のことを考えるきっかけを提供したことである。子ども支援の知識が十分でない中でも、自分たちが疑問を持ったことを職員に問いかけることが多かった。その結果、職員がプロジェクトの目的や団体の思い、支援のあり方等を改めて振り返ったり、課題を見つめ直したりする機会になった。

5 反省点

今回のインターンシップ・プログラムを通して、京都こども宅食の活動内容を知り、団体が向き合っている社会問題の現状を理解することに時間がかかったという点が反省点として挙げられる。これによって他の支援団体へのインタビューや団体を客観的視点から見つめることが期間の後半に偏ってしまった。もっと早く気付いたり考えたりすることができていれば、より実りのあるインターンシップになったと振り返る。さらに、宅食利用者のニーズを調査できなかった。「見守り活動の認知度がどのくらいなのか」「適切な支援団体につながることにニーズはあるのか」「利用者が団体に求めていることは何なのか」などを明確にするためには、アンケート項目の改善が必要だと考えたが、プロジェクト期間の都合上、新たなアンケート項目を提案することができなかった。

6 おわりに

約5か月と長い期間受け入れてくださったあだち福社会の皆様、コンソーシアムで考えを深く掘り下げるサポートをしてくださった先生方、インタビューにご協力してくださった支援団体の方々のおかげで、インターンを通して貴重な経験ができました。お世話になった方々に向けてこの場を借りて心より御礼申し上げます。